

豊かな言葉はロックナンバーから

先月、図書館司書の先生から「ルポ 誰が国語力を殺すのか」（石井光太著・2002年発行）を紹介され、読みました。筆者が漫画の原作の仕事をした際、「今の若い人は抽象的なセリフや風景描写が理解できないから、すべて直接的な言葉で書いてくれ」と言われたそうです。「有名な『あしたのジョー』のラストであれば、真っ白な灰に燃え尽きる描写ではなく、『もう疲れて死にそう。立ち上がれない』と言わせるか、本当に死なせるかしなければならない」そうです。また、友だち数人のLINEのやりとりで、「明日、みんなで遊びにいかない？」「行きたい！」「なんで来る？」このやりとりで「来る交通手段」を尋ねられた女の子が「なんでアンタが来るんだよ！」の意味で受け取り傷ついた実話など、子どもたちの国語力が、SNSの短文テキストコミュニケーションによって根底から揺さぶりをかけられているとの指摘。ただし、国語力を殺す要因は他にもあるので、機会があれば、ぜひ本を手にとってください。

さて、この本を読んでふと思い出したのが、RCサクセションの「つきあいたい」（1982年発売）という歌です。

「もしもオイラが偉くなったら 偉くない奴とはつきあいたくない たとえそいつが古い友達でも 偉くない奴とはつきあいたくない オイラがむかし世話になった奴でも いくらいい奴でもつきあいたくない だけど そいつがアレを持ってたら 俺は差別しない つきあいたい」という言葉だけをとらえると、「オイラ」はなんて薄情な男だと思われるかも知れませんが、何よりここで歌われる「アレ」が実に想像をかき立てます。実はこの歌は日本を代表する詩人・評論家の吉本隆明（2012年没。娘は吉本ばなな）も絶賛したロックナンバーでした。「アレ」が何であるかは最後まで明かされないのですが、今の若者はこの歌をどう聴くでしょうか。

ロックナンバーをもう一つ。今度はロック誕生の最初期、エルヴィス・プレスリーのデビューアルバム（1956年発売）の一曲目「ブルー・スエード・シューズ」からです。

「俺を突き倒して 顔を踏んづけたって構わない 町中に俺の悪口を言いふらしてもいいさ 俺の家を燃やそうが 車を盗んだって構わない したいようにすればいい だけど ハニー、靴は踏まないでくれよ 俺のブルー・スエード・シューズだけは踏まないでくれ」（ぜひ曲を聴いてください。最高です）もちろん靴の歌ではありません。「ブルー・スエード・シューズ」が何を意味しているか、今でもずっと考えています。私に限っていえば、「アレ」や「ブルー・スエード・シューズ」が何であれ、言葉が豊かな想像力を育てる機会になったのは間違えないと言えます。

ここで、本の内容に戻ると、「よく親の経済力や遺伝が子供の語彙力を左右するという人がいます。しかし、アメリカの研究でも日本の研究でも、親が子供に対して話しかける言葉の量と質が、経済力よりはるかに大きな影響を与えることがわかっています」とのこと。戯曲家のカレル・チャペックは「もし犬がしゃべることができれば、おそらくわれわれ人間は、人間同士つき合いにくいと同じくらい、犬ともつき合いにくくなるであろう」と言いましたが、あくまでも「豊かな言葉」こそが人間同士の関係を良好にし、豊かな社会を生み出すと信じていたいものです。

令和5年4月5日

大村城南高等学校長 中小路尚也